

トンボとり大作戦 2015

トンボとりをとおりて、自分たちの住む地域の自然環境に興味を持ってもらうため、より多くの機会を子どもたちに提供しようということで、2014年から6月～10月まで毎月トンボとり大作戦を実施しています。調査を通して飛来するトンボの種類の季節変化も確認出来ます。

入船公園

入船公園では、園内で一番広い自由広場に、自然発生した雑草を一定期間設置管理している一角がある。外来種の圧力が強まる中、近年、特に目立つ植物としては、在来のおオヤブジラミ(セリ科)

等である。この草原のおかげかどうか毎年、バッタやトンボも多く確認されるようになった。草原ビオトープとして自然のまま人の手を加えないで自由に繁茂させているので、工業地帯と市街地の間にある入船公園がこの地域の中で、生態系の一端を確保している風景といえる。

そのような中、毎年行われるトンボとり大作戦は、この草原ビオトープに飛んできたトンボを子どもたちが追いかけて、微笑ましい光景となり、トンボ等昆虫の存在だけでなく、トンボを取り巻く人間の子どもの生態系を確認することが出来る場ともなる。草原ビオトープでは翅を休めているメスを多く

見かける。オスのトンボがつがいを探しに入船公園に集まっているのかと考えると、とても良いトンボのデパートスポットというところだろうか。

公園としてはこのトンボとり大作戦への参加を楽しみにしている近隣の子ども達やその親がいるということが何よりもうれしい事だ。地域と公園を結ぶ一つの地域交流の場としてトンボとり大作戦が担っている役割は大きい。

(入船公園管理事務所 ㈱日産クリエィティブサービス 村松美緒)



JFEトンボみち

6月から10月まで毎月2回行うようになって、2年目となった2015年の年間結果は表のとおりです。こどもたちの参加者は延べ33名、トンボの捕獲は8種で合計81頭でした。シヨウジョウトンボ↓シオカラトンボ↓アキアカネと、季節とともに主役がバトンタッチしてゆく様子が良くわかりました。この場所でも良く見られたギンヤンマの飛来が少なく、1頭も取れなかったのが残念でしたが、水草が繁茂して開放水面が少なくなったのが影響しているようです。

飛んでいるトンボのほかに、トンボ池でのヤゴとり、ザリガニとり、魚とりも、おおいに盛り上がりしました。生きものとふれあうことで、未来を担うこどもたちに自然環境への興味を持ってもらえるように、今後もこの活動を続けたいと思います。こどもたち、またぜひ遊びに来てねー待ってるヨー！

(トンボみちファンクラブ 柴田芳宏)

トンボとり大作戦2015集計 (調査地点: JFEトンボみち)						
種類名	性別	調査月8 調査員数				
		6月	7月	8月	9月	10月
		9名	4名	4名	8名	8名
ショウジョウトンボ	♂	7	5	3	1	
	♀	4	1			
シオカラトンボ	♂		5	10		
	♀	1	2	1		
アキアカネ	♂				4	8
	♀				2	12
ウスバキトンボ	♂	1		1		
	♀	1		1	1	
コノシメトンボ	♂				1	
	♀					
オオシオカラトンボ	♂	2				
	♀	1				
チョウトンボ	♂		2			
	♀		2			
クロスジギンヤンマ	♂	1				
	♀					
合計		18	17	16	10	20
						81



アキアカネ♀の産卵を観察 (10月25日)



参加者の声

私が勤務しているマツダは本社が広島にあり、瀬戸内海を望む自然豊かな環境なので、京浜工業地帯を見て生物が生息しにくいように感じましたが、フォーラムの活動により、この地域の池に多様な昆虫が生息し始めていることを知りました。今後は瀬戸内のような環境をめざして地域貢献して行きたいと思っています。

(マツダ㈱R&Dセンター横浜 岡 康治)

今回のトンボ調査において、トンボを実際に自分の手で捕まえて同定してみる楽しさや調査を通じた人々との繋がりを実感することができました。私達参加者が調査に協力することで、企業緑地の存在価値の証明や臨海部におけるトンボ類の生態系ネットワーク評価等に少しでも貢献できるということが、大変魅力的であると思いました。また、小・中学生などの参加も多数見られ、子供達の自然学習の場という面でも、非常に有意義な調査だと思いました。

(東京都市大学 環境学部 環境創生学科 学生 藤田 雄大)

「トンボはドコまで飛ぶか調査2015年」活動に初めて参加した。

昨年以前からこの活動を実施していた事を知っていたが、参加メンバー・同定者・横浜市職員、特に各ボランティア団体の多くの方が参加活動されている事に驚き、感激した。

このような調査は生の実態の調査であり、地域の環境や動植物・水辺等に左右されると思うし、各種ボランティア団体の方々の参加があつてこそ実態調査が出来る事を行政は十分理解して欲しい(理解していると思うが)。同時に一部の関係者・ボランティアだけの情報でなく広く広報活動に努めて頂きたい。

来年も参加したいと思っはいるが、「トンボ」の知識不足反省を糧に少しは「トンボの知識」を習得努力したい気持ちである。

(神奈川県民 関口 敬三)

なつあかね、という珍しいトンボを捕まえてうれしかった。(嶋田 悠6歳)

たくさんゆるゆるのトンボを見たり、触れ合えて面白かった。(嶋田 誠19歳)

家では蛾から逃げ回っていた子どもたちが、この調査イベントに参加したとたん、捕虫網を持って広い野原を駆け回りトンボやチョウを追いかけていました(理屈ではなく、子ども本来の本能が目覚めたという感じで...)。

私の住んでいるまちでも(わずかですが)トンボがいます。私自身も、気になってどんなトンボか観察するようになりました。

「次はいつ連れててくれるの?」とよく子どもに言われます。この調査イベントは我が家の夏の恒例行事になっています。(嶋田 繁 45歳)

捕まえたトンボの羽根に番号を書き、またすぐ放して別の場所で捕まえることで行動を知るというトンボの生態を邪魔しない地道な調査方法だったのが考えられているなあと思いました。虫取り網を持ったのが小学生以来あまり捕まえられませんでした。見つけて捕まえる楽しさを思い出す貴重な体験でした。

(東海大学工学部 航空宇宙学科学生 枝 灯里)

今回はじめての参加で、調査の場所が、国道一号沿いだったので果たして飛んで来るのだろうかと思っはいましたが、はじめて見ると予想以上にバイクショップ店舗先ではウスバキトンボ、民家ではシオカラトンボとオオシオカラトンボが捕獲されました。今回の調査までにはより良い環境を作りたいと思っはしました。

(鶴見「みどりのルート」をつくる会 高田 房江)

スジヒラタガムシとチビマルガムシ

東京都市大学 環境情報学研究科 佐野 真吾

2015年8月、昨年の「トンボはドコまで飛ぶか調査」の時である。この日、北部水再生センターで調査を担当させていた。そして、炎天下の中、皆さんが捕虫網を振るい、せっせとトンボ調査をする傍らで、私は一人タモ網をビオトープに突っ込み地味に水生昆虫を探していた。トンボを捕獲する人たちは、やはりトンボをネットインさせた瞬間は、初対面の人同士でも盛り上がり喜びを共有し合うものである。しかし、皆さんと違う作業をしている私は、その輪に入れずにいたのである。しかし、私も負けずにはいたのである。しかし、私も負けずにはいたのである。しかし、私も負けずにはいたのである。これは大快挙である。間違ひなく今年のMVPは私であろうと確信した。ところが、皆さんに意気揚々と成果を自慢したものの返ってきた反応は「へえ〜」といった薄い相槌であった。水生昆虫、特に微小な種の魅力はまだ多くの人に伝わっていないのかもしれない。というわけでこの場をお借りして、その時確認された2種の水生昆虫を紹介させていただく。



図1. スジヒラタガムシ

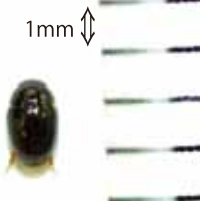


図2. チビマルガムシ